

令和 6 年度 【 学園研究費助成金＜ B ＞ 】 研究成果報告書

学部名 生活科学部

フリガナ イザワサチ
氏 名 井澤 幸

研究期間 令和 6 年度

研究課題名 名古屋市の民家利用型学童保育施設における施設継続利用の要因

研究組織

	氏 名	学 部	職 位
研究代表者	井澤 幸	生活科学部	准教授

1. 本研究開始の背景や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

本研究は名古屋市の「留守家庭児童健全育成事業」に登録されている学童保育のうち、民家利用型の学童保育を対象とし、保育室、休息室、指導員室、収納に着目し、諸室の面積、部屋数、インテリア、空間構成を類型化することで、施設満足度の高さを示す要因を明らかにするものである。調査は事例調査を主とし、実測と写真撮影による空間観察、空間利用に関する管理者へのヒアリングを行う。分析は、図面整理による諸室の面積、内装材、諸室の配置から施設を分類することで、汎用的な特徴を抽出する。これまでの調査から、施設の満足度の高さは土地や建物の所有条件とともに、施設の継続利用の要因となると考えられ、この点を整理することで、民家利用型学童の施設の安定的な運営の可能性を示すことができると考える。

2. 研究の推進方策 (300 字程度で記述)

研究対象施設は、2022 年度に研究代表者が行った「名古屋市留守家庭児童健全育成事業」に該当する学童保育施設を行ったアンケート調査 (68 施設/175 施設 (回答率 38.9%)) から抽出した。既存戸建住宅を利用し、かつ施設名が判明している 7 施設の中から 5 件を調査対象とし調査を進めた。残りの 2 件は 2023 年度調査済みである。

調査は施設の実測調査、写真撮影、及び管理者へのヒアリングを行った。調査内容は改修の有無、使用用途・内装材・家具配置の確認とした。管理者ヒアリングは、改修内容と理由、屋外空間の利用方法、戸建住宅を改修した建物を学童保育施設として利用することのメリット、デメリットについて、確認した。

3. 研究成果の概要 (600 字～800 字程度で記述)

5 施設の概要を以下に示す。N 学童 (借家、総面積 169.73 m²)、T 学童 (借家、総面積 135.72 m²)、H 学童 (借家、総面積 156.51 m²)、K 第一学童 (借家、総面積 124.55 m²)、K 第二学童 (借家、総面積 153.19 m²) である。

①保育面積と収納面積による使用用途への影響

N 学童に代表されるように、保育面積が広い場合であっても、収納場所が不足しており、長机などが片づけられておらず、子どもの活発な動きを阻害する事例が確認できた。一方、K 学童のように収納場所が十分にある場合は、広いスペースが確保され、鬼ごっこなどの動的遊びが展開されていた。

②休憩室の有無と使用実態

専用の休憩室をもつ学童は本調査では 1 件のみで、残りの 4 件は保育室と兼用となっていた。兼用スペースは 2 階に設置されていた。専用の場合は、日常的にはほとんど利用されていないことが明らかになった。

③住宅設備について

戸建住宅を使用していることから、トイレは増設せず 2 か所で使用しており、30-50 人の子どもが過ごすには不十分であった。また、玄関は広さに不満は見られなかったが、下駄箱を増設するなどの工夫がみられた。

④耐震対策と改修工事による建物の長寿命化

改修工事は 4 件の学童で実施されており、耐震補強や開口部の断熱工事がなされていた。

⑤まとめ

継続利用の可能性を高めるためには、広い保育室だけでなく、適切な収納が必要であることがわかった。住宅設備なども住宅らしさがあることで「安心感」を与える要因となっていた。

4. キーワード (本研究のキーワードを 1 項目以上 8 項目以内で記載)

①学童保育	②戸建て住宅	③福祉転用	④インテリア
⑤家具	⑥収納	⑦名古屋市	⑧継続利用

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

2023-2024 にかけて行った訪問調査により、合計 7 件の調査が完了した。部屋の面積・収納の有無、配置については一定の成果を得ることができた。本調査データをもとに、内装材の利用と 2023 年度に調査した屋外施設利用の分析を加え、2025 年度中に建築学会等での発表または学内の研究論文集への投稿を予定している。